



## 第二章 聖ジュバ学院、第九理科室

ランリはいつも通り今日も遅刻していた。妹に文字通り叩き起こされ、朝食もなく（妹任せなのが毎朝災いしている）詰め襟の学生服を肩に引っ掛けベルトはゆるゆるだ。水色がかった毛はあちらは外に跳ね、こちらはシーツのシワに沿って寝っぱなし。たれ耳は父から受け継いだものだがこんな時ではだらしなさに一役買うばかりだ。本来からして眠そうな目は走っている今でも眠気が勝っている。体力のない体を無理矢理動かしつつよりきつくなる通学路に行く。聖ジュバ学院は町の中心、町役場に併設されている。役場が町の一番高い位置にあるため学校も一緒に高くなる。ついでに水路がそこらじゅうに有りこれをまたぐ橋の殆どがアーチ状だ。おかげでランリは毎朝マラソン登山しているようなものだ。いつまで経ってもタイムが伸びないのは妹による食事制限（イジメ）のせいだとランリは確信している。早起きすればいいなどという妹の主張は全くの捏造だとも確信している。

そんな頭にくる日常もとりあえず一段落した。校門に入ったからだ。先に来ていた妹の横を走り抜け（今日もよく頑張りましたねーとは聞こえないふりをして）他の学生も追

越しつつ、つまり何故周りがいつも焦ってないのかなど考えもできず教室に駆け込んだ。黒い漆喰で塗られた木造校舎は深緑の分厚いカーテンで日が遮られランリをますます眠くさせる。

「おはよー、ランリ」

ランリにとっての朝は自分内マドンナであるクルフェちゃんの挨拶からだ。ランリにとっての幸いはクルフェが仲良しグループの一員であることだ。

「おっはようクルフェちゃん」

クルフェの薄緑の目にいつもながら見とれつつ今更ながら毛を撫で付けベルトを上げる。ハッキリとした境界がある白と灰色の毛、少なく長い髭、スカートに穴を開けず下から出す長い尻尾はいつか下着を暴露してしまうんじゃないかと心配になる。そうでなくとも細く白い足は男に変な気を起こさせるには十分だ。コレはやっぱ僕が守るべきだし、というかあの目はソレを期待しているんじゃない？そうでなきゃあんな色っぽい目は出せないだろう。実際僕に話しかけるときだけ髭が違うんだ。つやつやしてて、

「おーっす！」

「ランリはもう少し早起きするべきだね」

いいところで邪魔が入った。仲良しグループおまけ組、自称筋肉質の太っちょ・マツピとガリ痩せ・トト。そして、

「みなさん、プリントの提出を」

ちびメガネ・アブミだ。ぶっちゃけクルフェちゃん以外知らない。それが贅沢だと言うならこのちびメガネだけでも外して欲しい。ほんとにコレがクルフェちゃんと同種の生物なのだろうか？膨れた顔はチリチリした産毛でまだらに黒い。顔以外の毛は逆に剛毛で体中三つ編みだらけにしている。生意気にもクルフェちゃんのマネをしてスカートに穴を開けていない。いびつに曲がり固まったコイツの尻尾は下着をこちらに見せつける暴挙に出ることも。黄色いチェック柄のパンツに足から伸びた三つ編みが挟まっているのを見た時はさすがの僕も

「ランリ。プリント、ぷりんと」

クルフェちゃんのお陰で思い出さずに済んだ。ランリはカバンをあさり、プリントを忘れてきたことをアブミに告げ引っ叩かれる日課をこなしクルフェちゃんのパンツが見えないかどうか確認しつつ席についた。一限目の宿題を忘れるのもだいぶ慣れてきた。

ランリはこの生き地獄を社会のせいに行っている。実際そうなのだ。決まり、制度の下で生きることを、それをなんら疑問に思わなくさせる教育という奴隷製造システムが強要される社会。悪があるのは悪を悪と思わない、思わせない社会があるからでつまり悪は社会が有るからこそ成り立っているのだ。だからこそ今自分は宿題を忘れたとか成績が悪いとかいう捏造された悪の下アブミと、それを不気味に照らすランプと共に図書室なんかにいるのだ。

「アナタが不良になると私の評価に関わりますので」

アブミは委員長だ。成績だけはいいのだ。でなければ他に何ができるといえるのか。神様はよく考えていらっしやるようだ。迷惑なことに。

「とりあえずこの本でも暗記しといてください」

図書室を自分たち以外が使っているのを見たことがない。本が積み重なってどの本を取ろうにも雪崩が起きるであろう場所や、明らか届かない場所に吊るしてある本棚。本自体で棚が作られたなんとも器用な区画など使えない本ばかりがあるのだから仕方がない。一体どうやってアブミは本を探してくるのか。しこたま嫌な顔をしつつ本を受け取ってすぐ枕にする。

「面倒くさがってくれてありがたいよ」

「アナタには単純作業すら難しいでしょうが。それと、」

クルフェちゃんが居る。こちらにお尻を突き出し尻尾を少しずつ持ち上げる。「見たくないの？」こつちを挑発する声。しかし僕は動じない。それどころかクルフェちゃんを片腕で乱暴に抱き寄せ耳元で囁く「見られたいだけ？」腕の中で女の体がひくつく。「あなたがそれだけで満足するから」「怖いんだ？」「クルフェの細い太ももに外から手を這わす。上へ。内へ。僕の中で少女は今ハッキリと震えている。下着の上をゆっくりと撫でる。すぐに下着は終わってしまう。尻尾穴のない小さないやらしい物だから。けどこの子はこちらに体を押し付け震えを止めんと必死だ。「大丈夫」僕は下着に手を掛けながら言う。クルフェは震えた、けど僕を頼った声で言う「お願い」

「話を聞いてください」

突然、浮遊感がある。と、鼻に鈍痛。

「ふぶっふっ！？」

ランリはたれ耳が立つ勢いで頭を上げる。鼻に手をやる。熱い。アブミがちり紙ケースを差し出してくる。どうせ自分たちしか居ないと図書館に常備しているものだ。やたら埃っぽいのだ、ここは。受取り丸めて鼻に詰める。枕がアブミの手に握られていることをランリが確認できない内に話が進められる。

「身勝手なオナネタにしていること、ご本人に言いますよ」

「してない！ 気もない！」

このちり紙をそのようなことに使ったことは一切ない。断じて！

「そうですか。では今言ったように今夜、マックロ出勤です」

― マックロ ― ソレを聞いてランリの鼻血は止まった。

「ヤダ」

「暗記もできないアナタが唯一、留年しない方法です」

「じゃ、暗記の仕方教えて」

「残念ながらそれだけでは卒業後、役場に入れません」

何故かランリの将来は決定されていた。ランリ自身は好きな女とセックスする以外は未来など何でもいい。ただ、役場は面倒そうと勝手に思っていた。パン屋も建築士も先生も芸術家も面倒そうだった。

それに輪をかけて面倒なのがマックロという役だった。

「ウロコ谷の人たちを今夜中にノコ川へ移します」

人助けなど興味ない。僕はそんな偽善者じゃない。大体そういうのは無償でやるべきだ。しかも外側の、低階級の人を助けるなど差別し見下している証拠じゃないか。憐れむなら今の自分を捨て全財産でもって助けるべきだ。同じ土地で同じく苦しみ、死ぬべきだ。共倒れなど意味がない？ 世界全てでやれば皆平等、平和だ。そうしようともせず甘えるだけの社会は、ソレに属する個人は、卑怯な幸せ者でしかないのだ。

「では卑怯者の代表として参加してください」

ランリの駄々を一蹴するアブミは自分の予習を始めていた。



大鈴が鳴っている。いつもならランリは意気揚々と廊下を踏みしめる時間だ。アブミとの時間に耐えきった自分に残っているのは食べて寝るだけというご褒美だからだ。しかし、

今日はマックロがある。そんな時アブミは決まって家に来るのだ。何を取り入ったのか両親からの評判もいい。というか勘違いされている。今夜もランリの「決定済みの」将来に華が咲くことだろう。更に明け方は筋肉痛だ。前は散々岩を砕いて回った。今回は何をさせられるのか。

「って言うか行きたくない」

アブミに聞こえるよう言ったはずだが、隙間の空いたカーテンと戸締まりのチェックを理由に無視された。締め切られた夕方の校内はランプなしでは歩けない。仕方なくアブミの持つランプに付いていくことになる。アブミの不細工な尻尾がスカートを持ち上げ床からの照り返しで浮かび上がる下着には出来る限り気づかないよう顔は斜め右に向けておく。そのせいか第九理科室から同じ学校貸出しランプの明かりが漏れていることに気づいた。アブミは反対側のカーテンをいじっている。なんとかアブミを視界に入れたくないランリは扉の隙間から漏れる光を覗いた。

「こんなところですか？」

「燃えるだろ？」

「標本がいい雰囲気だと思いませんか？」

女一人と男二人がランプに照らされている。男二人だと判ったのは一人がスカートで、もう二人が下半身を露出しているからだ。一人は脂肪の付いた体からコレまた太い、いかにも弾力の有りそうなモノが、もうひとりとは折れないかどうか心配になる足とは比べ物にならないぐらい丈夫そうで長いモノが突き出ている。ランリは男性器に注目したかった訳ではない。女が跪きペニスを二つ持っているからだ。竿に手を掛けゆっくりと絞るように揉んでいる。女が背中を向けているので見られないが、顔に近づけているのは判る。

「もうギチギチにしちゃって。ふっ、うん……。あふっ」

「へへ、よっぽど欲しかったんだな」

「ちよっと、マッピンのとぶつけないでもらえますか？」

女が一旦口からペニスを外したようだ。

「なんで？マッピンのチンチン、プニプニで気持ちいいじゃん」

「良すぎるから駄目なんだよ。トト、ホモだからよ」

「何を言い出すんですか！」

太い男がエヘラエヘラと平謝りし瘦せたほうが憤慨してる間も女は二人のモノを擦り先端を舐め遊ぶように回しながら口へ含む。



「そろそろ出そうだけ」

「早いですよ。ちょっと、僕の方速くしてもらえますか？」

言われて女はガリの性器を啜え頭を前後に動かす。

「ずるいぞ！なあ、俺にも……イテテテテ！」

デブの性器が握りつぶされる。思わず腰を引いたようだが女に掴まれ逃げられない。

「あー、僕も一発目、出そうです」

「うぐう、お、俺も」

女は2本同時に啜え込む。前からなら女の下品な顔が拝めるはずだ。

「うっっほう！」

「……！」

二人が射精したようだ。女は手を離し口を押さえる。男二人はその光景をランプの光がそう見せるのか、見下したような顔で見守る。女が顔を上げた。

「へへ、気持ち悪いな。全部飲んじまった」

「全くですよ。マッピンの精液と混じるとか冗談じゃない」

「二人共、いつも多すぎ」

「んなこと言っても調節なんて出来ねーし」

「多い方が良いとは思いますが」

「エッチなんだから」

女は立ち上がりながら二人の股間に手を伸ばす。そこはもう次の準備ができていた。太ったほうが女の背後に周り片手で抱きかかえるように胸を鷲掴みにする。

「そんなのにヤラレたいのか？エロ女が」

「ふうんっ、あ…：もう」

女は制服の下から入った手が好きなように自分を弄るのに抵抗しない。それどころか体を男に預け、もたれ掛かる。瘦せは前に回り込みこっちから見えなくなってしまふ。しかしどうやらスカートのホックを外したようだ。布が床へ落ちる。

「また婆臭い下着履いてますね」

「お腹までなきや寒いのに」

「なんかタオルみてーだな」

「ふかふかで気持ちいいでしょ？んっ」

前の男が女に覆いかぶさる。顔と顔を合わせ水音を立たせる。

「まーだ俺の精液残ってんじゃね？あとチンコ押し付けんな。触りにくい」

後ろの男は前へ、女の股間へ手を伸ばしている。挟まれた女は腰をくねらせ自分から求めている。上からも下からも男の言いなりで喜んでいる。

「やっぱ、ランリも誘おうぜ」

女の口が解放される。口周りを拭っていて返事までに間が空く。

「えー、ヤダー」

「けどアイツ仲間外れってのはなあ」

「僕もランリは是非参加すべきだと思いますよ」

「へー、じゃあトトの本命はランリなんだ」

「なananんですか！！」

「俺、浮気相手なのかよ」

場違いに和んだ談笑が続く。三人共仲が良いのだろう。

「ランリが来たらアブちゃんもきちやうし」

「アブミが？なんで？」

「ふーん？」

何か納得がいてないらしい男達を馬鹿にした艶やかな声が響く。

「ランリとは友達がいいの。アブちゃんだって」

「俺達だって友達だろ？」

いつの間にか女の下着はなくなっていた。男二人が前と後ろから女を持ち上げる。

「やってほしいんだろ？それだけの癖に」

「難しいこと言うよりお似合いの言葉がありますよね」

女の吐息がこっちまで聞こえてくる。

女は男達に逆らえないようだ。いや、そんなこと考えない。

「うん、今は気持ちよくして。二人が欲しいの！私を犯して無茶苦茶にして！！」

何か鼻をくすぐった。突然の生理現象だったが口を両手で覆い歯を食いしばって耐える。いつの間にか横にアブミが立っていた。小さくなってきたランプの光で顔は判らない。ハンカチを差し出している。

受けとったランリは目にグシャグシャ押し付けながらアブミに腰を抱かれ艶声を背に歩き出した。